

幼稚園における手技と小学校低学年における 手工科の教育内容の関連に関する研究

清原みさ子

はじめに

本論集第49号では、大正時代の幼稚園における手技と小学校低学年における手工科の教育内容の関連について考察してきた。本論文では、1926（大正15）年に幼稚園令が出され、小学校令が改正されて高等小学校で手工科が必修となった後、戦時教育体制である「国民学校、師範学校及幼稚園ニ関スル件」が教育審議会から答申される1938年までを取り上げる。

まず幼稚園と小学校の手工科をめぐる歴史的展開について簡単に触れた後、幼稚園の手技と小学校低学年の手工科で行われていた教育内容を明らかにした上で、その関連性について検討したい。

1. 小学校の手工科と幼稚園をめぐる歴史的展開

(1) 手工科をめぐる状況

1926年の小学校令の改正により、高等小学校の教科目として手工科がはじめて完全に必修となったのは、手工教育史上画期的なことであった。手工教育関係者は喜んだが、小学校長や教師の中には、歓迎しない者も少なくなかったという。当時、東京女子高等師範学校附属小学校訓導であった山形寛は、手工科のような面倒なものが必修になってどうするのか、そのうちまた法令が改正され再び加設科目になるであろうし、そうでなければかなわない、手工科のようなものは本気でやる気がしないと書いた千葉県小学校長がいたことを紹介している。続けて「このような空気が一部にあったものであるから、手工教育に関係あるものは、今度は後戻りしないようにと一生懸命に研究に着手した」¹と述べている。それは、昭和に入り手工教育に関する著書や手工科について記述された著書が多数出版されることにつながる。

1926年の7月から8月にかけて、文部省主催の夏期講習会が東京高等師範学校で開かれ、その講師と講習受講者として高等小学校の「手工科課程案」²を作成した。この案は、男女別に「二箇年程標準」「三箇年程標準」「二箇年程簡易施設」に分けた表になっている。それぞれで取り上げる種類として、男子は「製図」に加え「木工附金工」、「木工」「金工」、「厚紙細工・竹細工の類」「簡易木金工」があげられている。女子では、「糸細工」「布片細工」「簡易木金工」が取り上げられている。「簡易施設」では「簡易木金工」の代わりに「厚紙・竹木・蔓等の加工」が組まれている。

1927年には、文部省は小学校手工科教授要目案を示した。尋常第一学年から高等第三学年までの教授要目で、尋常第五学年以上は男女別になっている。これは、それ以後の教授内容や題目に影響を与えた。

1931年には中学校令施行規則が改訂され、作業科が基本科目に加えられた。作業科には園芸、工作、その他の作業が含まれ、工作について中学校教員対象の夏期講習会が、1934年まで文部省により開催された。1931年には、師範学校規程も全面改訂された。

文部省は手工科を奨励し、地方でも手工科に関する展覧会の開催が増加し、郷土教育、作業教育の主張とも結びついて、手工科は盛んになっていった。『手工研究』には、1937年から38年にかけて「県下手工教育の現状」と題して、各地の状況が報告されている。佐賀県では、1926年に高等小学校で手工科が必修となる前には「殆ど施行されずに居た程度」であったのが、「数年前の労作教育の思潮盛なる頃は非常な活気を呈し、又郷土教育思潮の盛んとなるや農村的手工教材の研究に一層の発展を見た」ことにより、「尋常小学校に於いても漸次加設を見るに至り大半実施せられて居る状態」になっているという³。島根県では、1929年度に55%であったのが、1936年度にかけて「手工科及工業科視學員制度を実施」したり研究会を開催したりして、「殆んど全部加設を見るの盛況を呈するに至つた」という⁴。京都府でも、「尋常科は必須科目になつて居らないから実施しなくともよい等と、考へて居るものは絶無と言つてもよい、寧加設云々するのが不思議な位で」⁵あり、福島県は、1934年度の実施状況調査で「大体七〇パーセントの実施状況と推断」⁶できたという。このように広

幼稚園における手技と小学校低学年における手工科の教育内容の関連に関する研究

がっていたが、尋常小学校においては、必修にはならなかった。

(2) 幼稚園

1926年に幼稚園関係者待望の幼稚園令が制定されてから、園数、在園児数ともに増加していく。園数では、1924年度から31年度にかけては毎年100ヵ園以上増加し、1937年度には2,000になる。在園児数では、1928年度に10万人を超え、1937年度には162,027人にのぼる。このような量的拡大は、私立幼稚園によるところが大きかった。

この時期の全国的な研究大会としては、1928年に全国幼児教育研究大会と全国教育大会保育部会が開かれ、1930年には、帝国教育会主催の第二回全国保育大会が開催された。保姆の資格向上や待遇改善、幼稚園普及の方法等が協議されている。

幼稚園令制定に向けて活動してきた全国幼稚園関係者大会は、1924年の第四回以降、なかなか開催されなかったが、1931年に第五回大会が開かれ、保姆養成に関する文部省の諮問への答申案や、幼稚園の普及に関して協議している。1935年には第六回大会が開催されているが、ここでは、幼児に国民精神を涵養する方法も協議され、時代の状況が反映されるようになってきている。

以前から活動していた日本幼稚園協会や京阪神連合保育会に加えて、1928年には仏教保育協会が結成され、基督教保育連盟の創立準備が始まった。さまざまな研究会や講習会が活発に行われていた。

文部省主催の幼稚園保姆講習会は、1924年から東京女子高等師範学校と奈良女子高等師範学校で開かれている。1927年には、東京では「幼稚園の手工（六時間）」を山形寛が担当し、奈良では「手工（八時間）」を横井曹一が担当していた。1929年からは、東京では及川ふみが手技に関する講習をしている。1930年と1932年から36年にかけてと、最後の幼稚園保姆講習会となった1938年には、奈良では開かれていない。

文部省主催以外にも夏期講習会が行われていて、その中で、手技の講習も取り上げられていた。たとえば、東京昭和保姆養成所と日本遊戯研究会の1929年の保育夏季講習では、「製作実習（四時間）」「自然物利用の手遊品の研究（二時間）」が組まれていて、前者の講師は武井勝雄であった。仏教保育協会でも

夏期講習を行っていて、講師として藤五代策、膳真規子、及川ふみ、卜部たみというような人々の名前があがっている。手工教育関係者や現場の保姆たちが、実技的な講習の主役を勤めていたことがわかる。

各県で行われていた保育大会でも、手技に関することがしばしば談話等で取り上げられていた。また、大会時に行われる保育参観でも、手技に関することがしばしば取り上げられていた。

1928年には、東洋幼稚園の久門嘉祐を中心に幼児の手技研究会がつくられ、毎月一回研究製作会が行われていた。この研究会では、「幼児及小学校低学年の手技教育の完成を目標としての研究」⁷を掲げていた。講習会とは異なり、より日常的に互いの情報交換も含めた研究が行われている。

このように、1920年代後半から30年代にかけて、講習会や研究会等で手技に関する研究がかなり活発に行われていたと思われる。

2. 手技と手工科で取り上げられていたこと

(1) 手技

本論集第49号で取り上げた『全国幼稚園関係者大会記録』の「手技手工ノ種類統計」⁸のように、幼稚園における手技の種類を調べたものはこの時期には見当たらないので、幼児教育に関する著書の手技に関する記述や、雑誌『幼児の教育』等に見られる各幼稚園の保育要目等から、手技の種類を探ってみる。

『系統的保育案の実際』や『幼稚園の経営』をはじめ計13冊の著書と、熊本幼稚園、岡山市深砥幼稚園、松本幼稚園等の保育要目や保育項目及び当時の保育内容に関する調査等を合わせて、24例の中で取り上げられている細工をまとめて多いものを表1に示した⁹。

この時期によく取り上げられていたのは、「粘土細工」「塗り絵」「切り紙、剪纸」「摺紙、折紙」である。「画方、画き方」も比較的によく取り上げられているが、1930年代に入ると、「自由画」という表現が多く見られる。「積木、積み方」や「豆細工」は、昭和の初めのものではよく取り上げられていた。この他には、フレーベルとその弟子たちの恩物と作業である「輪ならべ」や「棒排べ」「六色三体」等も取り入れられていた。また、「手工テープ」や「画用紙構成」

表1 手技で取り上げられていたこと

粘土細工	19	三体・球つなぎ、繋ぎ方	8
摺紙、折紙	19	織紙	7
塗り絵	16	縫取り	6
切り紙、剪紙	16	組紙	6
貼紙	12	きびがら細工	6
積木、積み方	11	厚紙細工	5
豆細工	10	色板、板並(排)べ	5
自由画	9	切抜	5
画き方、画方	9	木工、大工仕事	4
自然物利用	8		

を取り上げている著書もあった。

大正時代の手技で行われていたことと比べると、「粘土細工」は増え、「組紙」「織紙」「箸・環排べ」は減っている。

(2) 小学校低学年の手工科

1927年には文部省が手工科教授要目案を制定する。この要目によると、第一学年には「紙細工」で「折紙及切抜」と「粘土細工」「豆(蜀黍稗)細工」が上げられている。第二学年では、「紙細工」が「切抜」になっている¹⁰。これ以後の著書では、手工科の教材としてこの要目を例示したり、この要目の解説を載せているものもある¹¹。

先にもふれたように、手工教育関係者たちは活発に研究をすすめ、多数の著書が出版されている。岡山秀吉、阿部七五三吉、三苦正雄、横井曹一たちの著書も続々と刊行された。また、従来から研究成果を刊行していた師範学校の附属小学校のみならず、各地の公立の小学校からもガリ版刷りのものも含め、研究成果がまとめられている。訓導協議会のような研究会からも、手工科に関する研究物が出されている。

低学年の手工科で取り上げられていた細工と題目・細目を検討するにあたって、この時期に同一の著者が複数の著作を残している場合は、比較検討する上で、できるだけ一種類に絞った。岡山秀吉の著書としては、『改訂増補新手工

科教材及教授法』¹²を取り上げた。この著書は1928年に出版されてから版を重ね、当時多くの人々に読まれていたと思われるからである。三苦や横井の著書では、学年別の教材や細目が詳しく書かれているものを選んだ¹³。

本論集第49号で、大正時代には第一、二学年とも「粘土細工」「豆細工」「折紙細工」が多く、次いで「切抜（貫）細工」が約半数で取り上げられていたこと、「色板排べ」が激減していること等を明らかにした。ここでは、学年別の教授細目や教材排列の載っている37冊の著書等から、第一学年36冊、第二学年34冊で取り上げられている細工をまとめて、多いものを表2にあげた¹⁴。

表2. 低学年の手工科で取り上げられていたこと

第一学年		第二学年	
粘土細工	36	粘土細工	33
切抜、切紙	30	切抜、切紙	28
折紙	25	黍稈細工	16
黍稈細工	19	折紙	7
豆細工	16	画用紙細工	7
ちぎり紙	10	貼付・貼紙細工	5
砂遊び	8		
画用紙細工	6		

大正時代と比べると、「豆細工」が減少し、「黍稈細工」が増えている。特に第二学年で「豆細工」は激減している。「豆細工」と「黍稈細工」の両方を取り上げているものもあるし、「豆・籾細工」で両材料を混ぜて使用することも考えられている。「色板排べ」も減少し、「遊戯的手工」の中で取り上げられているのを含めても4例のみである。

3. 教授細目・題目について

各細工でどのようなことが行われていたかについて、手技と手工科の両方で比較的多く取り上げられていた「摺紙、折紙」「粘土細工」「切紙、切抜」「豆細工」について見ていくこととする。

(1) 手技で組まれていた細目・題目

まず「摺紙、折紙」で具体的に題目が最も多く上げられているのは、松石治子の『指導日案総合保育』（以下、松石とする）である。ついで多く上げられているのは、熊本幼稚園の保育要目（以下、熊本とする）と、御津幼稚園の年少組の様子を紹介（以下、御津とする）である。松石には、「雛人形」「チューリップ」「植木鉢」「蝶」「砂山」「電車」「飛行機」「つばめ」「舟」「金魚」「朝顔」「せみ」「象」「馬」「豚」「水鳥」「鶴」「兎」「奴凧」「風船」「羽子板」「宝船」「勲章」「軍艦」をはじめ、多数の題目が記されている。熊本では、「山」「花籠」「蝶」「かぶと」「長烏帽子」「時計」「朝顔」「既習のものを随意」「蓮の花」「二隻舟」「バツタ」「柿」「皿」「烏帽子」「菊」「花電車」「洋傘」「兎と亀」「郵便配達夫」「勲章」「門に旗」「自由」が取り上げられている。御津では、「お山」「舟」「蝶々」「飛行機」「二隻船」「ヨット」「家」「兎」「手提袋」「オルガン」「紙人形」「落葉籠」「三宝」「亀」「手提袋」「馬」「自動車」「三宝」「門」「内裏雛」が取り上げられている。

この三つに共通して取り上げられている「山、砂山」「蝶」「二隻船、二隻船」のうち、「山」は和田実の『実験保育学』（以下、和田とする）に、「蝶」は和田、卜部たみが『幼児の教育』に連載した月ごとの「幼児生活」（以下、卜部とする）及び森川正雄の『幼稚園の経営』（以下、森川とする）で上げられている。「二隻船」は、武井勝雄の『幼児教育全集第六巻』の中の「幼児の喜ぶ手工」（以下、武井とする）で取り上げられていた。

「摺紙、折紙」の題目が記入されていた著書や保育要目は8であったが、上記のもの以外に4で取り上げられていたのは「飛行機」（松石、御津、卜部、武井）、「馬」（松石、御津、森川、倉吉幼稚園）及び「かぶと」（松石、熊本、和田、森川）である。「オルガン」「兎」「ヨット」「提灯」「柿」「バツタ」「帽子」「朝顔」「亀」「勲章」等も、複数の著書や保育要目で取り上げられていた。この他、昭和初期に幼稚園に通っていた人の回想で、「鶴、れんげ草、オルガン、小船、風車、やっこさん、郵便屋さんなど」を折ったことが語られている¹⁵。

次に「粘土細工」であるが、武井に「食物」「果物及野菜類」「器具類」「玩具類」「交通機関」「動物」「人物」に分けた「子供の好んで作るもの」が多数

上げられている。『系統的保育案の実際』（以下、『保育案』とする）と御津には、比較的多くの題目が記入されているが、保育要目等では具体的な題目の記述は少ない。最もよく登場するのは、「団子」である。「桜餅」や「柏餅」のような季節や行事にあわせたもの、「バナナ」や「いちご」、「りんご」、「柿」のような果物類、「茄子」や「きゅうり」のような野菜類や「松茸」は、複数の著書等で上げられている。「汽車」や「自動車」「軍艦」のような乗り物も同様に取り上げられている。

動物については、「亀」が複数の著書で取り上げられているが、熊本は「動物いろいろ」、御津は「動物」というように具体名を上げていない場合が多い。及川ふみの『幼児の絵と手工』の中の「幼児の手技の導き方」（以下、及川とする）では、年少で「かたつむり」「亀」「おたまじゃくし」を記載しているが、年長では「動物」となっている。『保育案』も、年少では「亀」「動物」、年長では「動物の自由製作」となっている。「人物」も複数の著書で取り上げられている。

「粘土細工」の場合、「自由製作」も多く、たとえば、『保育案』では年少、年長とも「自在」が8回組まれている。なお、卜部の年長組では、「木の葉の皿」が取り上げられている。

「切紙」の題目は、熊本、及川、武井、松石、『保育案』で多数上げられている。『保育案』では「鋏仕事」となっているが、内容的には紙をはさみで切る「切紙」とみなせる。ここでも、年少組では多くの題目が記入されている。「チューリップ」「朝顔」のような花が多い。特に及川は半分近くが花である。花以外では、「金魚」「蝶」「鯉のぼり」「切符」「提灯」「輪つなぎ」等が複数で取り上げられている。

「豆細工」は、今まで見てきた三つの細工と比べると、取り上げている著書等が少ない。題目が記されていたのは、熊本と卜部、松石、森川及び武井である。複数で上げられていたのは、「旗、国旗」「ブランコ」「梯子、火の見梯子」「日傘、傘」「船」「飛行機」等である。卜部の年少組では、「ひごの折方豆のさし方等」が取り入れられていた。

(2) 手工科

1927年の文部省の「小学校手工科教授要目」を見ると、第一学年の「紙細工」では「動物・植物・人物・風景・器物等ノ折紙及切抜」、「粘土細工」では「動物・植物・人物・器物・船車等」、「豆（蜀黍稗）細工」では「器物・建物・船車等」となっていた。第二学年は、それぞれやや「程度ヲ高メ」たもので、「紙細工」は「更ニ幾何形・模様・建物等ヲ加ヘタル切抜」が加えられている。この要目に倣って、題目に「動物」「乗り物」というような書き方をしている著書も見られるが、この時期には、細目・題目を取り上げている著書は多数見られるので、細工別に検討する。手技との比較のため、まず「折紙」を取り上げる。

「折紙」を第一学年で取り上げている23の著書等のうち、「紙鉄砲」を上げているのは18で一番多かった。次いで多いのは「飛行機」の14で、「兜」の10がそれに続いている。後は少なくなっていて、「舟、船」が5、「箱」が4、「二艘舟」「家」「蟬」「鶴」がそれぞれ3である。「オルガン」「金魚」「兎と亀」を取り上げている著書等もある。第二学年では、「折紙」の細目・題目を上げている著書等は5と激減し、「鶴」が3、「帆かけ船、帆船」「福助」「蟬」がそれぞれ2である他は、異なるものが上げられている。

「粘土細工」に関しては、第一学年では27、第二学年では28の題目・細目がある。第一学年では、「球」が4、「卵」が5、「球、毬と卵」が3で、「団子」と「串団子」が各5で、丸められるものが多く取り上げられていることがわかる。「供餅」「重ね餅」「鏡餅」を合わせると12になる。この他、比較的多かったのは、「達磨」の6、「水鳥」と「蠟燭」の5であった。「好きなもの」を取り入れているのは12、「自由、自由製作、自由選題」を取り入れているのは8で、この他に「工夫作」「すきな玩具」というのもあり、子どもたちの自由に任せることが広く取り入れられていたことがわかる。第二学年では、「葉形の皿」「木の葉の皿」等表現は異なるが、木の葉の形をした皿を作ることが8で、最も多かった。次いで「兎と亀」となっているものも合わせて「兎」を作るようになっているものと「花瓶」が各6、「文鎮」が5、「お茶道具」「茄子」がそれぞれ4である。

「切抜、切紙」では、第一学年で最も多かったのは「紙鎖、紙鏈」の18である。これは色紙を一定の幅に切り、輪にしてつないでいくもので、部屋の装飾にもされた。次いで多いのは、「紙帯」の11、「国旗」の10である。「雪だるま」は8、「四角（形）排べ」「三角（形）排べ」は両方一緒に取り上げているものや「模様」としているが同じ内容のものを加えると、それぞれ6である。「門」は5、「提灯」「鳥居」「押風車」はそれぞれ4の細目で上げられている。第二学年では、取り上げられている題目が異なり、第一学年のように集中して上げられているものはない。「景色」の6、「風景」と「紋形」の各5、「風車」「桜（ノ）花」「尺度使用法」の各4が比較的多い。「国旗」や「紙帯」が第二学年になっている細目もある。

「豆細工」の第一学年で多かったのは「弥次郎兵衛」と「ブランコ」の6、次いで「旗」と「鳥居」が5であった。「黍稗細工」でも「弥次郎兵衛」が6、「ブランコ」が5で多かった。この二つの細工は、接合部分を豆にするか黍稗にするかで異なるが、作り方は同様である。豆と黍稗を併用している細目もあるので、両者を合わせて見ると「弥次郎兵衛」が12、「ブランコ」が11と多い。「火の見梯子」も入れた「梯子」類も10で多い。「馬、犬」「馬又は犬」も入れて「犬」を上げているのは9、同様に「馬」を上げているのは6である。「鳥居」は7、「門」「椅子」はそれぞれ5である。第二学年になると、「豆細工」を取り上げているのは3例のみで、「黍稗細工」も若干少なくなっている。「団扇」「舟、艦船」の各5、「飛行機」「机」「椅子」の各4が多い方である。「荷車」「電車」「汽車」「犬」はそれぞれ3である。「団扇」や「犬」のように、細目により取り上げられている学年が異なるものもある。

4. 手技と手工科の関連

(1) 手技と手工科の繋がり

手技と小学校低学年の手工科で取り上げられている題目・細目を比較してみると、どの細工でも同じ題目があることがわかる。まず「摺紙、折紙」であるが、複数の幼稚園に関する著書や保育要目で取り上げられていた題目のうち、「二艘船」「オルガン」「家」「飛行機」「兜」「舟」「兎と亀」は、手工科でも取

り入れられていた。特に、「飛行機」と「兜」は多くの著書等で上げられていた。「紙鉄砲」や「奴」「袴」「提灯」「三宝」等は、幼稚園でも小学校低学年でも取り上げられている。「鶴」は、第一学年と第二学年で取り上げている著書が同数であったが、幼稚園の手技でも行われていた。「蟬」も同様に、松本幼稚園の1929年度の「保育日誌」にも「かぶとからすぐ出来る蟬を教へる」¹⁶という記述がみられた。

次に「粘土細工」であるが、幼稚園でよく取り上げられていた「団子」は、小学校でも多く取り入れられている。「茄子」や「胡瓜」、「かたつむり」や「亀」、「汽車」や「自動車」「軍艦」のような乗り物も、両方で取り上げられている。「かたつむり」や「亀」のように幼稚園の年少（4～5歳）で上げられているものもある。「木の葉の皿」や「茄子」「亀」のように、第二学年で上げられているものも、幼稚園で取り入れられていた。

「切紙」では、手技で花が多かったこともあり、共通の題目は多くはない。「朝顔」「鯉のぼり」「蝶」「提灯」くらいである。「鯉のぼり」と「提灯」は、第一学年で上げている著書等もあれば、第二学年のものもある。「蝶」は第二学年で取り上げられている。第一学年で最も多く上げられていた「紙鎖・紙鏈」は、「輪つなぎ」という名称で手技でも取り入れられている。

「豆細工」に関しては、手技で複数の著書等で上げられていた「旗、国旗」「ブランコ」「梯子、火の見梯子」「船」は、手工科の「豆細工」又は「黍稗細工」でも取り上げられている。「船」は第二学年で組まれている場合が多い。「ブランコ」が第二学年になっている教授細目もある。幼稚園の年少で行われていた「ひごの折方豆のさし方等」は、「籤の切り方豆の刺し方」として取り上げている教授細目もある。

以上のように、細工により異なるものの、全体的には同じ題目が多数取り上げられていると言える。「摺紙、折紙」では、「飛行機」のように複数の折り方があるものは少ないので、同じ題目の場合、幼稚園では難しすぎるか小学校低学年では易しすぎるかのどちらかであるが、「オルガン」や「家」等は簡単に折れるので、小学生には低学年でも簡単すぎると思われる。「飛行機」でも、武井の「幼児の喜ぶ手工」で上げられている図¹⁷を見ると、日高の『手工科指

導の理論実際』¹⁸や大阪市小学校共同研究会の『手工教材』¹⁹等で上げられているものと同じ長方形から折る「飛行機」である。畠山の『実際活用を主としたる新手工科教授細案』に載っている「飛行機」二つの図のうちの一つは武井の図とほぼ同じである²⁰。

手技では、『学校家庭手技及手工教材』と『最新手技資料と其扱法』以外に多くの図を載せている著書等は少ないが、「切紙」や「豆細工」「黍稗細工」で手技と手工科で上げられている図を比較すると、同じものがある。

「切紙」では、手技で「輪つなぎ」、手工科で「紙鏈」と呼ばれることが多かった、紙を細長く切り、輪にしてつないでいくことは、幼稚園でも小学校第一学年でも同じ作り方で取り上げられていた。

及川ふみの『幼稚園の手技製作』で年少組に取り上げられている「風船」²¹と、大阪市小学校共同研究会の『手工教材』の「風船」²²は、卵形あるいは楕円形を切るようになっている。同じ年少組の「切紙」で、及川ふみが載せている「朝顔」²³の図と畠山の図²⁴の葉の形は、当然であるが似ている。花は畠山の方が折紙になっているため比較できない。

武井は「黍稗細工」を取り上げているが、そこに掲げられている「ブランコ」や「火の見の梯子」「馬」の図²⁵や、松石の『指導日案総合保育』の「馬」の図²⁶は、手工教育研究会の『手工科教授細目』の「火ノ見ハシゴ」²⁷や学校美術協会の『手工指導講座』の「籤黍細工の導き方」の「教材例図」²⁸にあるものと同様である。

このように、幼稚園における手技と小学校の低学年の手工科の内容が重なっていると、幼稚園出身者は同じことを幼稚園よりも多い人数の中でやらされ、興味を失ったり、簡単すぎてつまらなかつたりするわけである。幼稚園と小学校のつながりが問題であったと思われる。

(2) 幼稚園の手技と小学校低学年の手工科のつながりに関する論

幼稚園と小学校の連絡に関しては、本論集第45号でもふれたように、1915年の全国幼稚園関係者大会での文部省諮問案の一つであったこともあり、雑誌『幼児の教育』や『京阪神連合保育会雑誌』でも取り上げられていた。手技と手工科のつながりや区別についても、これらの雑誌に関連記事が掲載されてい

たし、本論集第49号でふれたように「遊戯的手工」を取り上げている著書も見られる。手工科の始まりを手技に見るとらえ方は、明治時代の終わりには岡山秀吉の著書を初めいくつかの著書で見られ、大正時代に入ってから同様の見方があった。

昭和になってからも、鈴木定次は『手工教育学原論』のなかで、「紙細工、布片細工、等の様な技芸を教へた場合はあつたが」今日のような手工教育の先駆は「東京女子師範学校附属幼稚園で（明治九年頃）フレーベル式の手技即ち現今小学校初年級の手工の如き板排べ、棒排べ、折紙、組紙、豆細工、粘土細工等を教授せるが是れを以て日本手工教育の発祥とせねばならない」「フレーベル式手技的手工は我が国下級部の手工と変化し上級部手工の基礎と」なつたと述べている²⁹。このようなとらえ方は、『現代實際教育大系第九巻図画手工教育篇』³⁰や『欧米最近の図画手工』³¹にも見られる。岡山秀吉は1929年に出版された『初等中等手工科教材』の中で、幼稚園の手技の「板併べ・箸併べ・折紙・組紙・豆細工・粘土細工等は、とりもなほさず小学校下級部の手工であるが故に、我が国小学校の手工科は、こゝにその端を発したと言ふべき」で、「フレーベル式の手工は、幼稚園の発達と共に漸次世人の認むるところとなつた」と述べている³²。昭和10年代に入っても、阿部七五三吉が『手工教育学原論』の中で、手工教育は「手技の教育に端を発して」いて、「幼稚園に採用した手技も、所謂恩物と称するフレーベル式のもの」であつたとし、「恩物」を「二十遊戯」として紹介している³³。大竹拙三の『実用指導手工教育体系』³⁴や、伊藤信一郎の『手工教育学原義』³⁵にも、同様な考え方が記されている。手工科の始まりを手技に見る考え方は、かなり一般化していたと思われる。

小学校の低学年、特に第一学年は遊戯的であるとして、「積木」や「砂遊び」を取り入れている著書等も目に付く。たとえば、『手工科指導の理論実際』では第一学年の第一学期の第一週から第五週に「砂遊び」で「砂山」「トンネル」「花園」「砂菓子」が組まれている³⁶。これほど多くの回数を「砂遊び」にあてている細目・題目は少ないが表2から、「砂遊び」を取り上げている著書等が8あったことがわかる。

おわりに

昭和に入り1938年までに、手技と手工科がどのような教育内容で行われていたか、どのような変化が見られたか、両者にどのような内容的関連が見られたか明らかにしてきた。大正時代に広がった幼児の生活や季節に即した活動の中で手技を取り上げることは、昭和に入っても引き続き行われていた。題目を決め、見本を見せてその通りに作るようなやり方は影をひそめ、自由に作る事が一般化していく。手工科でも、「自由製作」「自由選題」「すきなもの」と表現は異なるが、自由に作る事が取り入れられていた。それに加えて、「好きな景色」や「すきな動物」、「いろいろな家」というような、形を自分で考えて作ることもしばしば取り上げられている。手工科でも、手本の通り作ることは、減ってきている。

このような状況が、国民学校芸能科工作となって戦時色が濃くなる中でどのように変化していくのか、また、手技への影響はどうであったのか探ることを、次の課題としたい。

註

1. 山形寛『日本美術教育史』、黎明書房、1982（復刊第1刷）、569頁。
2. 同上書、570～573頁。
3. 日本手工研究会『手工研究』209号、1937、51～52頁。
4. 同上書、53～54頁。
5. 同上211号、1938、56頁。
6. 同上212号、1938、54頁。
7. 日本幼稚園協会『幼児の教育』第29巻第1号、1929。
8. 『全国幼稚園関係者大会記録』、文部省普通学務局、1916、111～113頁。
9. 川崎利太編『各科教授の理論と実際』、新潟県長岡女子師範学校附属小学校、1927、「幼稚園保育要項」の5～8頁。
藤五代策『学校家庭手技及手工教材』、培風館、1929。
木下一雄『幼稚園實際的保育学』、東京保姆専修学校出版部、1930、150頁および249頁。
森川正雄『幼稚園の経営』、東洋図書、1931、88頁および141～144頁。
和田実『実験保育学』、フレーベル館、1932、121～123頁および164～168頁。
永澤義憲『幼稚園教育の実際』、厚生閣書店、1933、141～153頁。

幼稚園における手技と小学校低学年における手工科の教育内容の関連に関する研究

堀七蔵『幼稚園保育の諸問題』、東洋図書、1934、334～348頁。

山本猛『幼稚園託児所保育学綱要』、三友社、1934、177～179頁。

東京女子高等師範学校附属幼稚園編『系統的保育案の実際』、日本幼稚園協会、1935。

朝原梅一『幼稚園託児所保育の実際』、三友社、1935、148頁。

横井曹一『最新手技資料と其扱法』、東洋図書、1935。

及川ふみ「幼児の手技の導き方」、霜田静志編『幼児教育全集第六巻』、刀江書院、1937、131～139頁。

武井勝雄「幼児の喜ぶ手工」、霜田静志編『幼児教育全集第六巻』、刀江書院、1937。

松石治子『指導日案総合保育』、三友社、1937。

岡山県保育史編集委員会編『岡山県保育史』、フレーベル館、1964、188頁。

松本市立松本幼稚園百年誌刊行会編著『松本市立松本幼稚園百年誌』、1987、416頁。

日本幼稚園協会『幼児の教育』第27巻第8号から第29巻第2号にかけて掲載されたト部たみの「幼児生活」の紹介。

日本幼稚園協会『幼児の教育』第28巻第4号、1928、43～59頁。

日本幼稚園協会『幼児の教育』第30巻第5号、1930、37頁。

日本幼稚園協会『幼児の教育』第35巻第5号、1935、53～57頁、同第6号、67～73頁、同第12号、44～52頁。

日本保育学会『日本幼児保育史第四巻』、フレーベル館、1971、55～56頁、62～63頁および68～70頁。

10. 『文部省新刊小学校手工科工業科裁縫科教授要目』、培風館、1927、7～8頁。

11. 註14に上げた畠山の著書（4～7頁）や、佐々木清之丞『小学校教授法沿革史』（厚生閣書店、1930、249～251頁）など。

12. 岡山秀吉『改訂増補新手工科教材及教授法』、培風館、1928、42～43頁および59～108頁。

13. 三苦正雄『細目式手工科指導書尋常科用』、目黒書店、1938。

横井曹一『尋一の手工』『尋二の手工』、厚生閣、1935、「尋一」62～73頁、「尋二」53～62頁。

14. 岡山、三苦、横井の上述の著書以外の34冊のうち、題目・細目の掲載されている著書等は27冊で、以下の通りである。

村田精『手工教授の実際』、1927、369～374頁。

鈴木定次『手工教育学原論』、同文館、1928、456～460頁。

山形寛「尋一の手工導き方」「尋二の手工導き方」、執筆者代表山田義郎『手工指導講座』、学校美術協会出版部、1929、「尋一」8～10頁、「尋二」6～7頁。

南義一『尋一各科学習の要点』、大鏡閣、1929、112～115頁。

本所区訓導協議会手工部『研究発表要項』、1930、1～28頁。

霜田静志、松岡正雄『尋常一学年手工指導書』『尋常二学年手工指導書』、厚生閣書店、1930、「一学年」9～13頁、「二学年」12～16頁。

奥野庄太郎『尋一各科学習の新潮と実際』、文化書房、1930、230～234頁。

日高長平『手工科指導の理論実際』、大同館書店、1930、76～112頁。

小縣巳組支会手工研究会編『手工教材集録』、1931、教材配当一覧表。

岸一敏『体験と作業に拠る各学年教育経営』、明治図書、1932、1009～1013頁。

原義人『私の手工教育』、学校美術協会出版部、1932、490頁および手工教育鳥瞰図。

芝区手工科訓導協議会編『手工科教授細目』、1932。

畠山康親『実際活用を主としたる新手工科教授細案』、厚生閣書店、1933、10～11頁および18～23頁。

那須田茂『新手工指導書』、文泉堂書房、1934、17頁および64頁。

手工教育研究会編著『手工科教授細目』、采文閣、1934、33～69頁および73～109頁。

石野隆、鈴木至郎『生活作業手工教育の新指導法』、精文館、1934、73～78頁。

大阪市小学校共同研究会編『手工教材』、1934、9頁および49頁。

信濃教育会東筑摩部会川手支会編『手工教授細目』、1～78頁、出版年は記載されていないが、1934年頃と思われる。

森山円三、中島栄八『手工科教授精案』、福岡市大名尋常小学校、1935、1～90頁。

関猛『尋二新手工教育の実際』、三友社書店、1935、36～40頁。

中谷健次、高橋千代三郎『図画手工全体系指導記録』、学校美術協会出版部、1935、462～465頁および468～469頁。

阿部七五三吉、東本貞治『毎週配当小学校手工教授精案』、培風館、1935、8頁および50頁。

三村正一『総合的発展的新手工指導の実際』、明治図書、1937、85頁および175頁。

新潟師範学校附属小学校手工部『手工教材体系と指導の実際』、萬松堂書店、1937、14～17頁および32～75頁。

別府尋常高等小学校『手工科教授細目』、1937。

大竹拙三『実用指導手工教育体系』、賢文館、1937、306～314頁。

伊藤信一郎『現代教育学大系各科篇第二十卷 手工教授学』、成美堂書店、1938、78～81頁。

題目・細目のない著書は、以下の通りである。

稲森縫之助『文化中心新教授学大系第十三卷 図画手工新教授法』、教育研究会、1927、175～176頁および196頁。

幼稚園における手技と小学校低学年における手工科の教育内容の関連に関する研究

京都府師範学校附属小学校編『各科指導の真髓』、杉本書店、1927、116頁。

東京府青山師範学校附属小学校『最新各科教育の真髓』、明治図書、1931、271～273頁。

静岡県浜松師範学校附属小学校『各科教育の新機構』、明治図書、1934、311～312頁。

六郷尋常高等小学校『各科指導要領』、「手工科指導体系」の4～6頁、出版年は記載されていないが、1934年と思われる。

三重県師範学校附属小学校小学校教育研究会『各科指導の要諦』、1936、418～419頁および430～434頁。

日本手工研究会『手工研究』186号、1936、134頁。

15. 日本保育学会、前掲書、153頁。
16. 松本市立松本幼稚園百年誌刊行会、前掲書、433頁。
17. 武井勝雄、前掲書、257頁。
18. 日高長平、前掲書、91頁。
19. 大阪市小学校共同研究会、前掲書、13頁。
20. 畠山康親、前掲書、70頁。
21. 及川ふみ『幼稚園の手技製作』、フレーベル館、1932、6頁。
22. 大阪市小学校共同研究会、前掲書、33頁。
23. 及川ふみ、前掲書21、24頁。
24. 畠山康親、前掲書、42頁。
25. 武井勝雄、前掲書、286頁。
26. 松石治子、前掲書、187頁。
27. 手工教育研究会、前掲書、36頁。
28. 佐藤平太郎「籤黍細工の導き方」、前掲『手工指導講座』、49頁。
29. 鈴木定次、前掲書、87～88頁。
30. 現代実際教育研究会『現代実際教育大系第九巻 図画手工教育篇』、章華社、1927、4頁。
31. 石野隆『欧米最近の図画手工』、日東書院、1930、225頁。
32. 岡山秀吉『初等中等手工科教材』、蘆田書店、1929、11頁。なお、この書名は奥付では『初等中学手工科教材』となっているが、内容的に目次に書かれている『初等中等手工科教材』が正しいと思われる。ここで取り上げられている「建築的製作」の図(120～122頁)と「折紙」の「幾何式」の図(137～138頁)は、Hermann GoldammerのDer Kindergarten (Carl Habel, Berlin, 1874)に出てくる図との共通性がうかがえる。
33. 阿部七五三吉『手工教育原論』、培風館、1936、347～348頁。

34. 大竹拙三、前掲書、174頁。
35. 伊藤信一郎『手工教育原義』、東洋図書、1938、226頁。
36. 日高長平、前掲書、76～78頁。